

法華経と私たち 第二十六回

妙音菩薩品 第二十四

そのとき、釈迦牟尼如来は眉間から光を放ち、東方の十八のガンジス川の砂の数に等しい諸仏の世界を照らした。それを越えた向こうに、浄光莊嚴と言ふ名の世界があつた。そこに仏がいて、浄華宿王智如来と号した。釈迦牟尼如来の光はあまねくその世界を照らした。その一切浄光莊嚴国に、妙音という菩薩がいた。善根を植え、百千万億の諸仏を供養して、深い智慧と三昧を得た。釈迦牟尼如来の光明が達したとき、妙音菩薩は浄華宿王智仏に言つた。「世尊よ、わたしは娑婆世界に行つて、釈迦牟尼仏を礼拝し供養し、文殊師利法王子菩薩、藥王菩薩、勇施菩薩、上行菩薩、莊嚴王菩薩、藥上菩薩に会いたいと思います。」そのとき、浄華宿王智仏は妙音菩薩に言つた。「お前はあそこの国へ行つても、その国を軽んじたり仏や菩薩や国土をさげすむような思いを起こしてはならない。」

妙音菩薩は、仏に言つた。「世尊よ、わたしは娑婆世界に行けるのも、すべて如来の神通力であり、如来の智慧のおかげです。」そして妙音菩薩は座を立たず三昧に入り、靈鷲山に蓮華の座を作つた。文殊師利法王子は、この蓮華を見て釈尊に訊ねた。「世尊よ、この菩薩はどのようにしてこの神通力を得たのでしょうか。世尊よどうかこの菩薩の姿が見えるようにしてください。」釈尊は文殊師利に応えた。「多宝如来が、妙音菩薩の姿を娑婆世界に見るように現してくれよう。」そのとき妙音菩薩はかの国を去つて八万四千の菩薩と共に現れた。妙音菩薩の眼は大きな蓮華の華のようで、面差しは端正で光輝いていた。身体は黄金に輝き、無量の功德を積んだ威風を払っていた。妙音菩薩は、釈迦牟尼仏の前に至り、百千金の値の真珠を奉つた。そのとき華徳菩薩が釈尊に問うた。「世尊よ、この妙音菩薩はどのような功德を積んだか。」

んでこの神通力を得たのでしょうか。」釈尊は華徳菩薩に語つた。「華徳よ、この妙音菩薩はかつて無量の諸仏に仕えて供養した。この菩薩は様々な身体に変身して現れ、あるところでは梵天の姿をしあるいは帝釈天の姿を現し、転輪聖王・長者・居士・宰相・婆羅門・毘沙門天王・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・魔護羅迦・人・非人等の姿を現してこの経を説き、地獄、餓鬼、畜生等の娑婆世界の諸々の衆生を救済してきたのである。この菩薩はこのように時と処に応じて変身し、声聞には声聞の姿で、辟支仏には辟支仏の姿で、菩薩には菩薩の姿で、仏には仏の姿で現れ法を説くのである。華徳よ、妙音菩薩はこのような神通力と智慧の力を持つてゐるのである。」華徳菩薩は釈尊に問うた。「この菩薩はどんな三昧にあつて、衆生を救えるのか。」釈尊は答えた。「それは現一切色心三昧という。ここに住して衆生を利するのである。」この妙音菩薩品を説いたとき、妙音菩薩と一緒にきた菩薩や娑婆世界の菩薩たちは三昧と陀羅尼を得たのである。

宝清寺の水谷庵で撮影

『ひみつきちのつくりかた』

この度、プロデューサーの恵水流生氏の依頼があり、「ひみつきちのつくりかた」と題する、左ポスターの劇場用映画が、宝清寺の施設「水谷庵」及び、あきる野市を主な撮影場所として撮影され、住職も出演することになり、完成致しました。



あらすじは、五十歳の佐藤（白畑真逸）がスパゲッティに頭を突っ込み急死を遂げる。佐藤の死を知らされたバツイチ子持ちのサラリーマン・山上（廣末哲夫）は地元へ帰り、佐藤の葬儀に参列すると、小学校からの同級生、御手洗（藤田健彦）、工藤（もりたかお）、豊永（佐藤貢三）と再会することになる。大人になり別々の人生を歩んだ四人の初老たち。昔話に花を咲かせると、工藤がある一冊のノートを取り出す。そこに描かれていたのは『ひみつきちの建設計画』。その夏、彼らはあの頃夢を抱いていた「ひみつきち」をも一度計画し始める。しかし、彼らの目の前には様々な「大人の事情」が立ちはだかるのだった。と言うもので、監督・脚本は板橋知也氏です。

宝清寺管理寺務所からのお願い

一 宝清寺にお墓があり、登録されている名義人が逝去された場合

① 新使用者への承継手続きが必要です。

承継手続きには、承継使用申請書、新使用者の住民票、及び、現使用者に発行している墓地使用許可証を一緒に提出して下さい。

② 管理料をゆうちよ銀行の自動引き落としにされている方は、新たに手続きが必要です。

引落口座名義人が逝去された場合、引き落としを停止させて頂きまので、新使用者の口座から管理料の自動引き落としを希望される場合は、あらためてお手続き下さい。

二 住職及び管理寺務所にご相談のある方

葬儀・法事・お墓の改修工事など、ご相談のある方は、事前にご相談の日時を電話で打ち合わせの上、ご来寺下さい。

三 お問い合わせについてお願い

各種お問い合わせは、午前九時から午後四時までにお願い致します。尚、ご不明な点がございましたら、管理寺務所までお問い合わせ下さい。



私は八月一日の初日に上映の映画館「シモキタ・エキマエ・シネマ『K2』」に行き鑑賞してきました。宝清寺の家族葬用施設水谷庵、境内墓地入り口にある休憩所の東屋、秋川から墓地の間の畑・田んぼ通路、圏央道あきる野インター付近を中心に撮影された映画でした。板橋監督と恵水プロデューサーは「宝清寺の協力が必要でできない映画でした」と話していました。恵水プロデューサーから「あきる野市が中心の映画でもあるのであきる野市長にご挨拶がしたいのですね」とお願いして頂けないかと頼まれ、中嶋博幸市長に連絡をしたところ、「宝清寺のご住職が一緒ならば」と、公務で多忙のところ、時間をとり、会って頂きました。市長は板橋監督・恵水プロデューサーと和やかに談笑されて後、持参したポスターを眺め、一緒に写真を撮りました。板橋監督と恵水プロデューサーは大変喜ばれ、市長にも是非観て頂きたいと話すと、市長は「日の出のイオンモールの映画館でも上映されれば」と話されました。映画館は初日は満席でしたが、翌日から満席で映画に対する関心の高さが伺えます。

映画終了後、恵水プロデューサーがポスターの前で観客の皆様と挨拶をされていました。外では、板橋監督と出演者が出迎え、希望者と記念撮影をしており、和やかな雰囲気の中、映画の余韻を楽しんでいました。

この「ひみつきちのつくりかた」が、SKIPシティ国際Dシネマ映画祭2025にて観客賞を受賞し、レッドカーペットを歩かれたそうです。

シモキタ・エキマエ・シネマ『K2』では、八月二十八日まで上映しています。その後の予定は未定です。